

視 察 日 時	令和7年5月21日（水）午後3時30分 ～ 午後5時
視 察 先	徳島県徳島市（説明：市民文化都市市民協働課、まちづくり協働プラザ）
視 察 項 目	徳島市まちづくり協働プラザの取組について
視 察 概 要	（1）徳島市の公民連携・市民協働によるまちづくりについて ①公民連携の推進 SDGs 未来都市に認定されている徳島市では、徳島市が抱える課題を民間事業者と市が共有し、ともに未来を創るためのプラットフォーム『Co×Lab Tokushima（コ・ラボ トクシマ）』を通じて、パートナーシップによるまちづくりを推進し、誰一人取り残さない社会の実現を目指している。 事例として、徳島市×ヤマハ(株)による「ひょうたん島周遊船の電動化に向けた実証実験」、徳島市×(株)日産サティオ徳島による「公用車シェアリングの実証実験」、徳島市×NPO法人グリーンバードによる「支える阿呆プロジェクト@阿波おどり」など、大手企業や地元事業者、市民活動団体との公民連携が進んでいる。 ②市民協働の経緯 平成15年3月 「協働の基本指針」を策定 平成16年1月 徳島市市民活力開発センター供用開始 平成18年度～ 協働提案事業支援制度の選定開始 平成24年9月 市民会議を設置 平成26年2月 「協働の基本指針（改訂版）」提出 平成30年度～ クラウドファンディングの選定開始 ※魅力のある大きな事業の財源の確保、また広く一般から寄附を募ることで公費の投入を抑えながら支援を行う。 令和4年5月 根拠となる条例改正 ※徳島市市民活力開発センター条例を、徳島市まちづくり協働プラザ条例に改正し、設置目的の市民活動の健全な発展に「協働によるまちづくり活動を促進」を追加。 ③協働提案事業の例 ・複合的なイベントを用いた水際まちづくりビジョン策定事業 ・新しい水際まちづくりを創出する水辺の夢コンテスト開催事業 ・「水辺のまちづくり実証実験」のニーズ把握と広報活動事業 ※水辺の景観や大空間を備えた倉庫活用の可能性に魅力を感じた市民が集まり、「清掃活動」「倉庫から芸術や文化の情報を発信するイベント（アクア・チッタフェスタ）実施」「エリア活用に向け

	ての独自マスタープラン策定」の3事業を中心に活動している。 ※現在では、全倉庫の約3分の2以上が利用されるようになり、当該エリアは「水辺のオシャレなまち」「遊休倉庫街の利活用に成功したまち」として国内外から高い評価を得ている。 ※その活動は国からも認められ、令和5年度地域づくり表彰「国土交通大臣賞」を受賞している。 ④まとめ 現在は、市の市民協働課と市の指定管理施設である「まちづくり協働プラザ」が中心となって、多様な主体（NPO、市民活動団体、ボランティアチーム、地元企業、地域活動団体等）同士の各種連携を支援しながら、各種事業（事業共催、事業協力、人材育成、広報支援、後援等）を実施している。 (2) 徳島市まちづくり協働プラザの取組について ①まちづくり協働プラザ、通称：まちプラとは NPO活動の支援、行政との協働事業を推進するための拠点として「NPOに対する助言」「NPOと地域や行政をつなぐコーディネイト」「協働事業の開発」等の事業を展開している。 『つなぐ』…公民連携事業、ボランティア体験講座など 『つくる』…講座や研修の企画、ヒアリング調査、情報発信など 『ささえる』…交流スペースや機材の貸出し(非営利に限る)など 【事業の事例① 若者主体の清掃活動（グリーンバード徳島）】 同世代の若者が集まり、月3回、徳島の中心市街地の清掃活動を行っている。まちプラでは、環境NPO「グリーンバード徳島」を通して、活動に気軽に参加できる若者を増やしている。そうじ中のルールとして「おしゃべりをする事」があり、おそろいのビブスで参加するといったこともあって、学生同士（市内に国立大が1つ、私立大が2つあり）がつながるきっかけにもなり、参加者はかなり多い。 グリーンバードの活動システムとして、おしゃべりルールがあることで、「良いことをしながら知り合いが増える」を仕組み化している。 【事業の事例② 中心市街地の景観美化】 市の花壇があるが、花が植えられていないということで、2014年から始まった『花ロードプロジェクト』。「徳島に訪れる観光客やまちを愛する市民の皆様にも日々快適に過ごして欲しい」という想いをきっかけに活動がスタート。今では、毎回200人を超える参加者が集まっている。例として、予算はペチュニア80円×4万株。花は四半期で植替え。
--	---

②まちプラの役割と「阿波おどり 2024」の取組事例

まちプラの役割は、様々な活動チャンネルを持ち、気軽に参加しやすい環境・現場をつくることであり、社会課題解決と若者育成にもつながっている。

まちプラの地域活動の事例として、産・官・民・学がそれぞれの強みを出し合い実行委員会を組織して実施した「阿波おどりエコアクション 2024 報告書」の中から、次のアクションについてお聞きした。

『ごみゼロ連（踊りで魅せるごみ回収部隊）』…阿波おどりで注目を引き付け、それを見た観客の手持ちのごみを回収するというパフォーマンスを会場内で実施。未然にポイ捨てを防ぐことを目的とし、観客から多くのごみを回収した。

『エコステーション（ごみの回収と分別啓発）』…会場内に5か所のエコステーションを設置し、ごみの回収と分別の啓発を実施。阿波おどりに訪れた観光客約50,000人が利用した。

【実施体制】

- ・運営者…まちづくり協働プラザ（市民団体）
- ・責任者…阿波おどり実行委員会（公共/徳島市）
- ・活動主体…ボランティア（高校生・大学生・20代の社会人などが9割）
※地元出身で県外にいる大学生とその友達なども多い。
- ・活動資金…セコム株式会社（民間）

【お盆休み中の大変な活動に350人を超える若者はなぜ集まる？】

前述の環境NPO「グリーンバード徳島」で活動する若者たちが、主体となって集まっているためである。

グリーンバードの「日常のおそうじ活動」は、居場所・コミュニティとなり、参加者の関係性を構築している。そこから少しずつレベルアップしていくことで、関係性を基盤にしたチームワーク、チームによる社会課題対応として、「阿波おどりのごみゼロ連」等への活動につなげている。

【まとめ】

多くの若者たちの根底にある感情は『徳島おもんない』である。ソーシャルコミュニティ「グリーンバード」をつくり、「まちをよくしよう！」という共通の目的で、活動を通して継続的に集まり合うことで、自然と

	コミュニティに属している状態になっている。人のつながりを広げつつ、つながりの力を地域へ流し込む、コミュニティづくりと地域活動を両立するシステムが実現できた。 阿波おどりエコアクションは、観光庁のオーバーツーリズム対策事業として実施され、一定の活動成果を挙げている。「踊る阿呆」と「見る阿呆」に、ごみゼロ連の「支える阿呆」も加わり、それらがひとつとなって、若者（希少財産）とのつながり×コミュニティ運営×社会課題解決といった、3つの要素を交えた活動システムを構築し、地域にポジティブに関わる人を増やす＝関係人口の増加につなげている。 [質疑応答] Q. 活動システムの中で、重要なポイントは？ A. 参加者間の「関係性の充実」が、最も重要である。 Q. 「グリーンバード徳島」の活動はいつから始まったか。また、日の目を浴びるまでどれくらいかかったか？ A. グリーンバード徳島チームは、2013年に設立した。設立時の写真には現市長や市民協働課長も映っている。日の目を浴びたのはここ数年で、10年近くは日の目を浴びていないし、様々な失敗もあった。成立している仕組みを持ち込むことも、成功のための秘訣のひとつと考える。
所 感 (意見・感想・ 今後の課題等)	地域活動や公民連携の優良事例としてお聞きした、徳島市内で行われている「グリーンバード」や「ごみゼロ連」といった取組は、若者のニーズにもマッチしているため、まちづくりへの参加を楽しみながら促しているという意味で、大変参考となるものであった。地域にポジティブに関わる「関係人口の増加」につなげるため、本市の天神祭や荘内大祭など様々な祭りやイベント等においても、地元の高校生や大学生から、自然にかつ積極的な参加ができるような仕組みを検討する必要がある。 また、まちプラの岸田マネージャーからは、これらの事業は、最初からいきなり成功したのではなく、当初は様々な失敗があり、トライアンドエラーを繰り返して、ようやく花開いたものだと、リアルな声をお聞きした。 本市においても、ここで暮らしたい思える、そして、愛着の持てる地域となるように、公と民がそれぞれの持ち味を活かしながら、若者を始めとした多種多様な人たちが、失敗を恐れずに何事にもチャレンジできるような地域風土を育てていくべきであると受け止めた。

報告者 総務常任委員会 渋谷 耕一